
熱中症には気をつけよう！

むーらん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熱中症には気をつけよう！

【Nコード】

N1011V

【作者名】

むーらん

【あらすじ】

m i x i の『涼宮ハルヒのSS』から転載。

涼宮ハルヒに声をかけた男は自分のことをジョン・スミスだと名乗った。ようやく会えたジョンを前に狂喜するハルヒだったがだんだんジョンとの会話に違和感が生まれ：涼宮ハルヒの驚愕ネタバレ有り。

ジョン・スミスの正体（前書き）

涼宮ハルヒの驚愕ネタバレあり。

時期設定は高校2年生の夏ごろです。

ジョン・スミスの正体

「涼宮ハルヒの幻聴」

おい、という声がどこか遠いところから聞こえてきた。顔をあげようとしたけど思ったように体が動かない。体が熱い。頭がボーっとする。おい涼宮、とさっきの声がもう一度あたしに声をかける。聞いたことがあるような、ないような不思議な声。この声を聞いたのはいつだっただろう。

「起きるんだ涼宮ハルヒ。お前の会いたがってた俺が、もう一度だけ会ってやると言ってるんだ」誰かの手で頬を撫でられたとたんに体の不調が嘘のように消えた。体を起こして相手を探すと、片膝をついた知らない男がすぐそばにいた。

「知らないことはねえだろ。七夕の時散々こき使いやがって」七夕って…まだ頭がすっきりしない。あたしがこき使ってるのはキヨンしかないけど。そういえばこの男、どこことなくキヨンと雰囲気似ているわね。

「そいつじゃねえよ。そいつはジョン・スミスじゃねえ。普通の男子高校生だ」頭の中に稲妻が走った。七夕、ジョン・スミス…それを知っているのは…。

「ジョン・スミス!? あんたなのね!」胸ぐらをつかもうとして紙一重でかわされた。学生服ならネクタイを掴めてただけだ。ってそんなことどうでもいい。

会えた! 会えた会えた会えた!!!

「あんた今までどこにいたのよ！北高の制服着てたのに北高にいないしめっちゃ探し回ったのよ。しかもわざわざ北高に入ってあんたの」

「ストップ。お前からの質問は受け付けない。時間がないからな」片手をあげてジョンはあたしの会話を打ち切った。むう、喋らせなさいよ。こっちは言いたいことが山ほどあるんだからね。

「やれやれ。お前は中学の頃から何にも変わってないな」何よ失礼ね！あんたとは一度しか会ったことないのに適当なこと言ってる
と殴るわよ。

「適当なんかじゃない。俺はいつも見ていた。お前が小学校の徒競走で転んで泣いたことも、中学校の時クラスメイトの誰とどこでデートしてなんて言って振ったのかも、高校に入って変な団を作ったことも、ついさっきお前がそのキョンとかいう男と大喧嘩して逃げてきたことも、ちゃんと知っている」上気していた顔から血の気がすっと消えていくのが分かった。ついさっきまであった愉快な気分がまるで雪のように解けていったことも。

「ジョン…。あんた何者なの」

「普通の人間にはその質問に答えることはできない。だがお前には答えてやる」そう言ってジョンは場違いなほど朗らかな笑顔で言った。神だ、と。

バカじゃないの、とは言えなかった。ストーカーか宇宙人か超能力者だと思えないし。でもジョンが犯罪者だとは思いたくない

からジョンがそう言うならそうなのかとも思える。思えるけど。

やりのいしたと

「神様なんていない、か？それなら別に信じなくてもいい。これを知られた人間は生かしてはおけないからな。ああ、お前は殺せないから殺さないさ。いくら俺でも一度死んだ人間をもう一度殺すことはできない」物騒な単語がボロボロ出てきた。やっぱりジョンって…。

「逃げるなよ。本当に時間がないんだから」そう言われたとたん足が急に動かなくなった。まるで石になったみたいだ。

「何をしたのよ！変な真似したら舌嚙んで死んでやるから」スタスタと近づいてきたジョンは足を止めてため息をついた。

「だから死んでる人間は殺せないって言うてるだろ」ジョンは呆れたように、皮肉るように笑った。

「実感した方が早そうだな」そう言いながらジョンはあたしの頭を優しく撫でた。猛烈な嘔吐感と倦怠感、体の震えて心臓がバクバクしてあたしは地面に頭から倒れた。でもひんやりとした手が頭に乗せられたとたん、そんな症状が嘘みたいになくなった。

「熱中症。このクソ暑いときに飲み物も飲まずに歩き回りや倒れるのは当然だ」あたしは体を起こした。ジョンの目は見下すようだった。

「…暗示とか催眠術に決まってるわ。神様なら空でも飛んでみないよ」ジョンは少ししゃがんでふっとジャンプした。そのままスーッと重力を無視し続け、三メートルほど昇ったところで停止した。

「次は何をしてほしい」ぺたん、としゃがみこんだ。あたしが。…本物だ。本物の不思議だ。だけどそれはあたしが…。

「やっと信じたな。ずいぶん時間がかかったが、まあいい。じゃあ行くぞ」行くぞって…どこへ行くのよ。手を掴んで歩き出したジョンの首がぐるん、と回ってあたしを見た。

「もちろん死んだ人間が行くのはあの世だ。それとも地縛霊にでもなりたかったか」あたしは全力でジョンの手を振り払った。だいぶ前に夢の中でジョンの腕を振り払った時みたいに。

「なんでよ！普通こういうのって生き返ったり願い事を聞いてくれたりするじゃない」

「それはどこの世界の普通だ。人間が死ぬたびにそんなことしたら俺の身が持たねえよ」そう言ってジョンは手を掴んできた。

「最期にまた会いに来てやっただろ。それで我慢しろ」あたしはその手をまた振り払った。振り払った？違う、ジョンがあたしから離れた。少し驚いたような顔で空を見上げていた。

「まだ出て来るとは思いませんでした」あたしも振り返って見上げると空がどんより曇っていて、光り輝く巨大な怪物が立っていた。あれってあたしの夢に出てきた奴じゃない！巨大なそれは見た目の割に敏捷な動きで腕を振り上げるとジョンに向かって勢いよく振り下ろした。ふっとあたりから光が消え、光の巨人はいなくなった。…違う、あたしは見えていた。振り下ろされた腕がジョンに触れた途端、吸い込まれるように消えていったのを。

「少し大きかったな。味については：言わぬが花だろう」ジョンはそう言ってからあたしの手を引っ張って無理やり立たせた。

「待って。あたしまだ死にたくない！」ジョンは止まることなく歩き続け、あたしは引きずられたまま叫んだ。

「やり残したことがあるの！お願い！」ジョンの足が止まった。

最初の願い

「俺の知る限りお前は何か悔いを残すような人間じゃないと思っただが。やりたいことは全部やってきただろ」そう言ってジョンは空いている手で指折り数えた。

「野球もやった、孤島にも行った。夏休みも満喫して映画を作り、バンドをやってスキーもした。部誌を作ってチョコを作った。何よりも、お前は毎日を楽しんでたはずだ」言われているうちに涙がこぼれた。ジョンは本当に何でも知っていた。

「もっと…みんなと一緒にいたかった」却下、とジョンは答えた。

「後悔も、反省も、死んだ人間に尋ねたら必ずあるんだよ。キリのいいところで死ぬる人間なんていないんだ」また歩き出した。

「待って！本当に心残りが一つだけあるの！ずっとずっと迷って、やり残していることがあるの！」ジョンがあたしの手を放した。

「言ってみろ」心臓がバクバクする。ジョンは願いは叶えないと言った。でも今『却下』って言った。もしかしたら……もしかしたら。ううん、違う。そうじゃない。あたしが今、避けてきた、見ないようにしてきたことに、真正面から向き合っているから。

「キョン…と、…仲…：ううん。あたしは、キョンと付き合いたい」言った。言ってやった。誰にも言ったこともない、まして自分でさえ考えないようにしてきたことを。ジョンはしばらく黙ってあたしを見て、そうか、と言った。

「じゃあ行こう」再びあたしの手を取って歩き出した。

「なんで！？あたし嘘言っていない！本当に本当のこと言ったのよ！離してよ、元の世界に帰してよ！」

「人に言えて満足しただろ？心残りが無くなってよかったじゃないか。最初からずっと言ってたとおり、死んだ人間がいけるのはあの世だけだ」嘘…嘘よ。

「嫌よ！まだ伝えてない。キョンに言っていない。お願い！キョン助けて！キョン」

「…：ハルヒ…：」！？今、聞こえた！キョンの声が聞こえた！あたしは無我夢中で暴れた。

「キョン助けて！こっちよ！」ジョンの手が頭に触れた。さつきより強烈な嘔吐感と焼けるような熱さが体中に駆け巡った。

「…ハルヒ…」キョンの声はさつきより近くから聞こえた。でも、ここよ、と言おうとしても唇がガサガサいうだけで声にならなかった。ジョンは何も聞こえないかのようにあたしを引きずっていった。必死に顔をあげるとジョンの行く先には、何もなかった。何もない、ただの闇がどこまでも広がっているのが見えた。火達磨のように熱いののがたがたと震えが止まらない。ここよ、あたしを見つけてよ。キョン！

「わたしは、ここにいる！」カッと曇った空から眩い光が差し込んだ。握りしめられていた手がパツと離され、ジョンは手で光を遮ろうとしていた。光の中から一本の手が差し出された。ただの手、

だげどそれがキヨンの手だとあたしにはなぜか確信があつた。最後の力を振り絞って握った。その手が強く握り返してくれた時、周りの世界が暗転した。

帰還

「ハルヒ！しっかりしろ！」目を開けたとき、最初に映ったのはキヨンだった。何だか足元がふわふわする。両脇に何か挟んでるような感じがするけど。

「…ヨン」さっきと変わらず、唇がガサガサしてちゃんとした声にならなかった。

「この馬鹿！！急に怒ったと思ったらいなくなりやがって。長門がお前を見つけてなけりゃ死んでたんだぞ」…違うよ、見つけてくれたのは、キヨンだったよ。キヨンは誰かから渡されてペットボトルをあたしに飲ませてくれた。

「もうすぐ古泉が呼んだ救急車が来る。それまで絶対に喋るな。いいな」誰かが首筋にも冷たいペットボトルを乗せてくれた。分かったわよ、キヨン。ちゃんと声が出るようになるまで、黙ってることにするから。それからすぐだったと思う。遠くからサイレンが聞こえて救急車が到着した。なぜか鞆の上に乗せられていた足と、胴体を抱えられて担架に乗せられそのまま救急車の中に担ぎ込まれた。

「よろしくお願いします」キヨンが職員に頭を下げてくれる横で、古泉君が別の職員と話し込んでるのが見えた。みくるちゃんもキヨンの横でボロボロ泣いていた。誰よ、あたしのみくるちゃんを泣かせた奴は。…あたしだっけ。情けないなあ。キヨンしか見えてなかったけど、皆いてくれたんだ。よかった。あたしは安心して目をつむった。もう大丈夫、何も怖くない。あたしが一番大切なものも見つかった。ジョン・スミスよりも、ここにいるみんな。キヨン。ありがとう。眠りにつく直前、さっきの夢の最後を思い出した。光を

避けたジョン。でもどうして、どうして笑ってたのかしら。

神の正体

「お久しぶりですっ！長門先輩」

見る人が見れば先輩に偶然出会ったかわいらしい後輩の絵とも見えたかもしれない。そしてその後輩は恥ずかしがり屋の照れ屋なのかと思うかもしれない。世界のどこを探しても簡単に見つけられるような平凡な日常の情景に見えたことだろう。しかしよく見てみるとおかしなことに気付くだろう。先輩と呼びかけたのは小柄な女の子の方ではなく、明らかに年上に見える男の方だということに。

「さっきは見つけていただいてありがとうございましたっ！本当に死ぬかと思いましたよ！」そう言って、その男は忽然と消えた。消えたというのは減点法で採点すれば及第だが加点法での採点では少し足りない。より正しく言うのなら、今の今まで男のいたはずの場所に、どう見ても中学生にしか見えない女の子がまるで最初から彼女がそこにいたように立っていた、となる。整った顔立ちに大きな目、髪の毛は自由気ままな方向に伸びている。特徴的だったスマイルマークの髪留めは付けていない。渡橋泰水。涼宮ハルヒの生み出した、もう一人の自分…。

「あなたは」

「あたしは、わたあしです」さもおかしそうに笑う。

「あたしは、わたあし。先輩は、先輩っ…ですよね」ぴよんぴよんと地面を跳ねる。

「涼宮ハルヒに危害を加えるのなら」

「しませんしません。むしろ逆です。すこし背中を押しただけです」両手をポンと前に突き出してパンパンと柏を打った。

「…そう」

「えへへ、そうですよ。じゃあ先輩っ！今すぐ今すぐ大至急追いかけてください！追いかけて追い抜いて追い越しちゃえば、びつくりすること間違いなしです」スクワットのように立ったりしゃがんだりして渡橋泰水はビシッと病院の方角を指差した。もちろん、ほかの建物に阻まれて目視はできないが正しく病院の方角である。長門有希が視線を戻した時、渡橋泰水は消えていた。今回は減点法でも加点法でも正しく消えている。しかし現在の状態においては正しくとも根本では間違っている。消えたのではない、ただ還っただけだ。涼宮ハルヒのもとに。すべてを知っている渡橋泰水が、すべてを知らない涼宮ハルヒの中に、還ったのだ。無知と知が結びついたとき、一体何が起こるのか。長門有希はしばし考えたのち、考えを保留して病院へ向かった。

了

神の正体（後書き）

タイトルの通り、元々は熱中症に対する啓発SSです。

後日談は脳内補完でお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1011v/>

熱中症には気をつけよう！

2011年7月22日23時50分発行